

日米合同

ロス検事局と警視庁捜査第一課

捜査

Joint US/Japan
Criminal
Investigation

Jimmy Sakoda

ジミー佐古田

〔監訳者〕佐々淳行

〔訳者〕小泉摩耶

講談社

ロス検事局と警視庁捜査第一課

江苏工业学院图书馆
藏书章

ジミー佐古田
[監訳者] 佐々淳行

講談社

大正外国語
蔵

著者略歴

ジミー佐古田 一九三五年、米ワシントン州シアトルに生れる。日系三世。五八年ロサンゼルス市警察に入り、二六年間勤務。日系人初の警部補となる。七六年アジア特捜隊を自ら組織し隊長となり、数数の難事件を解決する。後にロス郡地方検事局捜査官に任命され活躍。著書に『ロス市警アジア特捜隊』(絶版)など。

監訳者略歴

佐々淳行 一九三〇年、東京に生れる。五四年東京大学法学部卒業後、国家地方警察本部(現警察庁)入庁。八六年、内閣総理大臣官房・内閣安全保障室の初代室長。英国C・B・E勲章、米軍民間人功労章他受章。著書に『危機管理のノウハウ』全三巻(PHP)など多数がある。

にちべいどうせうさき
日米合同捜査

——**ロス検事局と警視庁捜査第一課**

一九九六年十月二十三日第一刷発行

著者——**ジミー佐古田**
さこだ

監訳者——**佐々淳行**
さつきあつゆき
訳者——**小泉摩耶**
こいずみまや

デザイン——**鈴木成一** カバー写真——© Donald Graham/PPS

© Jimmy Sakoda 1996. Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

発行者——**野間佐和子** 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二二—01

電話 編集 〇三—五五五—五五九 販売 〇一—五九五—六六五 製作 〇一—五九五—三六二五

印刷所——**信毎書籍印刷株式会社** 製本所——**牧製本印刷株式会社**

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは

生活文化第二出版部あてにお願いいたします。

ISBN 4-06-20844-9 (生活文化第二)

定価はカバーに表示してあります。

まえがき

一般に「ロス疑惑」の名称で知られ、日本で異常なフィーバーを巻き起こした三浦事件捜査を顧みて、私はよく、なぜあれほど深く関わってしまったのだろうかと思議に思う。あの事件では結果的に、私の身内であるロサンゼルス市警と対立することにもなってしまったのだ。

この捜査から手をひくのは容易であつたし、そうすれば私の行動が批判されることもなかっただろう。しかし、それはできなかった。私がしたこと、しなかったことに関係なく、事件自体が生命を持ち、私に付きまとう宿命にあつたかのように、私を追いかけてきたのだつた。

この本を書くことは、私にとってカタルシス（精神の浄化）だつた。本を書くことは、内なる自分を見つめ、再評価する機会を与えてくれた。これほど深く自分の内面を探ったことはなかったのである。

太平洋戦争中、日系人強制収容所で幼い頃をすごすことによって、私は日本文化の影響を非常に強く受けた。永遠の糸は、知らない間につむがれていたのである。「義理」と「我慢」で織られた糸である。このような特性は、しばしば自己表現と自己主張を奨励する私の内なるアメリカ的特性と衝突した。しかし私は、日米二つの世界の最高のものを持ち合わせているのだと気がつくに至つた。よき友ミッチ加藤の死は、私に、二つの文化をもつ人間の複雑さを知らせてくれるとともに、文化の違いと調和していくように導いてくれたのである。

史上最初の日米合同捜査は、多くの関係者の献身的努力があつてこそ可能になつた。勤勉な現場警官の知識と経験がなければ、この事件は解決されなかつただろう。ここでは僅かな人の名前しかあげられないが、ミッチ加藤、デイク・グレイ、フランク・ガルシア、リック・ジョンソン、寺尾正大、若林忠純^{わかばるしただよ}、警視庁三浦捜査班の諸氏をはじめ、多くの人たちの努力の結果であつた。

合同捜査の結果、アメリカ国内で犯した日本人の犯罪が日本国内で起訴された。これは歴史的出来事である。本捜査で達成された成果が引き継がれ、日米両国を侵蝕しつつある国際犯罪に対する今後の日米合同捜査の序幕となることを願っている。

ジミー佐古田^{さこだ}

監訳者まえがき

一九八〇年代の日本で「三浦和義^{かずよし}」という名の知名度はもの凄く高かった。その名を聞けばひとは皆「ああ、あのロス疑惑銃弾事件の……」とうなずき合ったものだ。ひと頃はテレビをつければどのチャンネルも、この日本人離れた「青ひげ」的な生命保険金詐欺・囑託殺人容疑者の顔が、名前がブラウン管に登場し、新聞も雑誌週刊誌も三浦和義・ロス疑惑銃弾事件の記事で持ち切りだった。以後、彼に匹敵し得る悪役は、地下鉄サリン事件の主犯、オウム真理教の麻原彰晃^{しょうこう}ぐらいなものだろう。

この本は、起訴・有罪にもちこむことが大変難しい海外犯の、生命保険金の詐欺が目当てとされる囑託殺人事件を一二年という長い歳月をかけて遂に起訴、一審・二審とも有罪に持ちこんだ日米両国のド根性刑事たちの、執念の合同捜査物語である。

著者のジミー佐古田^{きこだ}氏は、ロス疑惑銃弾事件で日本でもすっかり有名になった日系三世のロサンゼルス地方検事局（検察庁）捜査官だ。

ジミーは太平洋戦争勃発と同時に、日系二世だった両親や弟とともに「敵性系アメリカ人」として資産没収のうえ、カリフォルニア州ツールレークの日系人強制収容所に入れられた。「二つの祖国」をもつ悲劇の戦時少年だった。そして強制収容所の屈辱の日々のなかで、サムライ精神を貫いた父親や教師たちから日本語と日本の伝統文化である「義理」と「我慢」の武士道を教えこまれ、我が身に流

れる日本人の血に誇りを抱く三世として育つ。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）ではフットボール選手として活躍し、一九五五年には陸軍に入隊する。

同年、韓国に駐留中にアメリカ陸軍兵士として初めて日本の土をふむ。その後、ロス市警本部警察学校で訓練を受け、一九五八年ロス市警に入り、麻薬取締官などを経て、七五年にはロス市警に新設された「アジア特捜隊」隊長の警部補に昇進する。

一九八一年一月一八日、ロサンゼルス市北フリーモント街の駐車場で日本人観光客の三浦和義・一美夫妻が車に乗った犯人らに銃撃され、夫は足に負傷、夫人は瀕死の重傷を負い、約二〇〇〇ドルを奪われるという強盗致死傷事件が起きた。その時、ジミー佐古田アジア特捜隊長は奇しくも東京の警視庁会議室で開かれた日米組織犯罪会議に出席していた。彼はサムライ、特に純粋な忠誠心と義理と我慢で亡君浅野内匠頭（なみののかみ）の仇討ちを遂げた赤穂（あこう）四十七士を尊敬していたので泉岳寺（せんがくじ）に参拝する。まさに日本人以上に日本人らしい刑事だった。

親日家の彼は、ロス市警の同僚から国際電話で受けた三浦和義なる人物の前科照会を、ごく当たり前のこととして、日本警察の会議仲間に問い合わせをする。国際会議の席上でその警察幹部が「現場の捜査官の一对一の情報交換こそ大切」との意見表明をしたから、素直にそうしたのだ。この結果、被害者然と振る舞っている三浦が、なんと少年時代から放火、窃盗、暴行、脅迫、銃砲刀剣不法所持などの犯歴があり、一九六八年には懲役一〇年の刑を受けた前科者であることが判った。

喜んだのも束の間、官僚主義的な日本警察の上層部は、この現場刑事同士のショート・サーキットの国際情報交換に露骨な不快感を示し、以後は正規の手続きをふんでインターポール（国際刑事警察機構）やFBI（連邦捜査局）や外交ルートを通じ、警察庁を通じて情報連絡をするよう、ジミー佐

古田氏に釘をさす。ジミーは、国際犯罪捜査協力にも本音と建前があることを知らされるのだ。徹底した現場第一主義者で、捜査官に国境はないと信ずる彼には、こういう官僚主義の発想は納得できない。

帰国した彼はアジア特捜隊として三浦和義事件の捜査に加わるが、グリーンの乗用車から狙撃されたという三浦の供述に疑いを抱く。それは白いバンがいたという複数の目撃者証言があったからだ。

ところがロス市警重犯課の担当刑事サートチとウイリアムズの両刑事はなぜか頭から先入観をもって白いバンの存在を否定し、三浦の供述を信用し、ジミー佐古田氏の捜査への参加を強く拒み、またもな捜査をしようとしなない。多分ロス市警にとっては、銃撃による強盗殺人など日常茶飯事で、まして被害者はアメリカ市民でない日本人観光客。一美夫人が死亡したのも日本送還後。約一億五〇〇万円という巨額の生命保険も保険会社の負担なので、ロス市警としては実害がないから本気で捜査しようとしなないのだ。

日本治安当局も、可能性よりは困難性に先に着目する「ことなか事勿れ主義」の官僚の特性で、あまり熱意を抱かない。だから日米捜査協力という看板は掲げても、実務的にはやれ外交ルートを通じろ、やれインターポールの正式手続きをしろのと、形式や手続きにこだわり、現場第一主義のジミー佐古田氏を切歯扼腕せつしやくわんさせる。ロス地方検事局もロス市警上層部も無関心で、積極果敢なジミー佐古田氏の捜査活動はむしろ上司同僚のひんしゆくを買い、遂に三浦事件の捜査からはずされてしまうのだ。

日本を訪れてマスコミの熱狂的な取材競争と、その過剰報道に煽られた日本の視聴者たちの昂奮を肌で感じたジミーは、これでは日本人観光客もアメリカは危険な犯罪国家で、強盗殺人を犯しても警察は捜査をしない無警察状態だと誤解してアメリカに來なくなるし、目前に控えたロサンゼルス・オ

リンピックの観客動員にも悪影響があると大局的観点から日米関係を憂えた。そして「二つの祖国」への愛国心と、凶悪犯罪を犯した悪党が処罰を免れて一般市民の中でのうのと暮らしていることは許せないという刑事の正義感から、直屬上司や担当刑事を飛び越して市警副本部長へ、さらにはロス市警の頭越しにロス地方検事局へ直訴するなど、三浦事件に本腰をいれて捜査せよと力の限り関係者の説得に努めるのだった。

一九八三年一月、三浦が経営するフルハムロード社の社員であり三浦の愛人だった白石千鶴子という女性の失踪届と捜索願いが家族から出された。正規の日米捜査当局はこれにも冷淡だったが、ジミーは非公式にロス周辺での身元不明死体の調査に協力し、その結果八四年三月、これまで身元不明死体ジェイン・ドウ八八号（男の死体だとジョン・ドウ）とされていた死体の歯型などが、行方不明の白石千鶴子のもものと一致することが確認された。日本のマスコミは沸騰した。

さらに日本のマスコミは、ロス疑惑銃弾事件の起きる三カ月前の一九八一年八月、矢沢美智子という女性が三浦にそそのかされて妻一美さんの殺害をうけおい、ロスのニューオータニホテルの一室で一美さんを殴打、傷害を負わしたが殺害には至らなかったという新事実をスクープして報道した。ところが、ロス市警も検事局もこれを浴室で滑って転倒した自損事故とみて、ロクな捜査もしないで放置していたことも判った。執念のサムライ刑事、ジミー佐古田氏は上司同僚の忠告を斥けてこれらの諸事件の捜査を続けていた結果、ロス市警重犯課へのお出入りを禁止され、検事局からも見放され、孤立した彼は一九八四年八月一日、二六年間勤めたロス市警を退職する破目になる。だが、彼は諦めない。

一九八五年三月、ジミー佐古田氏はこれまでの捜査データを揃えてロス地方検事局のライナー検事

長に直訴した。彼の意見具申に耳を傾けたライナー検事長は、ロス市警を辞めたジミーをロス検事局捜査官に任命し、三浦事件の捜査再開を命じた。ジミー佐古田氏は初めて上司に人を得たのである。ロス市警でも、人事異動により宿敵サートチらが転勤となり、麻薬課以来の同輩、メキシコ系フランス・ガルシア刑事がパートナーとなり、重犯課の立ち入り禁止も解除される。

そして、最も大きな変化が日米合同捜査の局面で起きた。テレビを見ていたジミー佐古田氏は思わず飛び上がった。一九八五年九月一日深夜、警視庁が東京・銀座東急ホテルで三浦和義を、矢沢美智子をそそのかして妻一美さんを殺害しようとした殺人未遂容疑で逮捕したことが報じられたからだ。そして警視庁捜査第一課管理官の寺尾正大警視がロス疑惑銃弾事件の主任捜査官となり、国際電話でロス検事局の捜査協力を求めてきたのだった。

寺尾正大警視とは、一九九五年の地下鉄サリン・オウム真理教事件で、山梨県上九一色村（かみくいつしき）のオウム関連施設の手入れなど、命がけの一連の捜査の陣頭指揮をとり、名実ともに日本の「トップ・コップ」の地位を確立した、現・警視庁捜査第一課長の寺尾正大警視正その人である。国民はまだ知らなかったが、彼は麻原彰晃率いるオウム真理教がサリン毒ガスもカラシニコフ機銃も持った恐るべき殺人集団であることを知っていた。かつて警視庁在職時代、私の副官（警視庁では「別室」と呼ぶ）だった寺尾警視正がオウム捜査の指揮をとることを知った私は、彼に激励と助言の電話を入れた。すると彼は、「老いて半身不随となって人に迷惑をかけながら生き長らえるより、私はこの一戦で花と散る覚悟でやります」とキツパリ言い切ったものだった。

寺尾警視 vs. ジミー佐古田氏。それはまさに現代の日米サムライ・デカの名コンビだった。以後、寺尾警視は一回訪米し、五回ロスで実地見分を行うが、ジミーとの仲は武士は相身互い、まさにピツ

タリ呼吸のあつた日米合同捜査だった。ジミー佐古田氏の信奉する「武士道」は、日本の現場捜査官寺尾正大警視に引き継がれていたのだ。

あの「サムライ」たちは、一体どこに行つてしまったのか。

明治二年版籍奉還が行われ、旧武士階級が「士族」になり、さらに明治四年廃藩置県が行われた頃、日本の人口は三四八〇万三〇〇〇人（総務庁統計局資料）だった。そのうち武士道を信奉する士族は、下級武士「卒族」一三万六八七三人を含めて三九万五八二五人。その家族一五一万五四一四人を加えると一九一万一二三九人、人口の五・五パーセント、二〇人に一人が「サムライ」種族だった。今、人口一億二〇〇〇万と当時の約四倍となったが、戦後の商人国家日本では商魂が士魂を辱しめ、官僚主義が運命共同体の義理人情の使命感をむしろ失ってしまった。ジミー佐古田氏と寺尾正大警視正は、生き残った数少ない現代のサムライたちである。

デカたちも次第にサラリーマン化していく現代、実に一二年間に及ぶ血の滲むような捜査を続け、遂に一九九四年三月三十一日、三浦和義を無期懲役、実行犯と目された大久保美邦は銃撃事件に關しては無罪とされたが銃刀法違反で懲役一年半の東京地裁の有罪判決に追いこんでいく。その日米合同捜査の一部始終をリアルに描いたこのドキュメントは、まさに捜査官必読の書といえよう。

振り出しに戻った再捜査の結果、ジミーが初めから着目していた「白いバン」フォードE Z 4 GH G J 〇九四〇の所在が判明した時、ジミー佐古田氏は寺尾警視を喜ばせようと東京へ国際電話をかけ、白いバンが発見されたことを告げた。その時の描写は、この捜査に命を賭けたサムライ刑事たちの心情が滲み出ていて、とても感動的であるので引用してみよう。

「……そのとたん、寺尾の声が遠くなつてしまった。

『寺尾さん、寺尾さん、聞こえますか』二、三秒たってから、電話の向こうで長く深い吐息のような音がし、続いて短く速い呼吸音が繰り返して聞こえた。私はフランクに目を向けて、送話器に手をあてた。

『彼は泣いているようだ』と囁いてから、また『寺尾さん、寺尾さん、聞こえますか』といった。

『ありがとう、佐古田さん、ありがとう』ふだんは感情を表に出さない警察官が何度も感謝の言葉を繰り返した……」

一九九六年七月

元内閣安全保障室長

さつさあつゆき
佐々淳行

【著者付記】

本書に書いたことは、私、ジミー佐古田の知りうる限りの真実である。事実は一切手を加えてはいない。これは、三五年間の警察勤務を振り返ったジミー佐古田の個人的回想である。

『日米合同捜査』に登場する名前の一部は、仮名にしている。また、本書に登場する関連の会話は、すべてその当時に記録されていたわけではないので、私の記憶と本書を執筆する上でインタビューした人々の記憶にもとづいて会話を再現している。

目次●日米合同捜査

——ロス検事局と警視庁捜査第一課

まえがき
監訳者まえがき——佐々淳行

プロローグ 19

第一章 日米組織犯罪会議

アジア特捜隊とは	24
人種差別社会の中で	32
ロス発東京行き	46
東京の懐かしい感触	54
日米組織犯罪会議に出席して	60
大阪のサムライ警察官	67
ロスからの捜査依頼	77
日米の壁の始まり	85

第二章 捜査のつまずき

銃撃現場を見る

94

わきあがる疑問

104

一億五〇〇〇万円の保険金

111

のしかかるプレッシャー

119

新しい担当課の流儀

125

ポリグラフ

131

思わぬ展開

136

第三章 ロス市警の厚い壁

新たな疑惑

148

日本で感じた期待の大きさ

157

ロス市警、動かず

168

拒絶の壁

174

警察官最後の日

180

再度の助力を請われて

183

地方検事長への直訴 191

第四章 検事局捜査官

地方検事局捜査官就任 198

捜査再開 202

容疑者たち 209

ビッグニュース 210

ケビン少年の消えない傷 213

目撃者を洗い直す 215

検事局内部の反目 224

第五章 警視庁捜査第一課

日米合同捜査の第一歩 236

日本人捜査官の疑問 242

東京で開かれた捜査会議 245

浮かんでは消える新たな容疑者

日米合同の現場検証 251

249